

# ブラームス: 交響曲第1番

H. S.

2017.05.07-

# 目次

はじめに	3
第1章 作曲に関する経緯	4
1.1 背景	4
1.2 作曲過程	4
1.3 初演	4
1.4 出版	4
第2章 作品の構造	6
2.1 概観	6
2.2 第1楽章: <i>Un poco sostenuto — Allegro</i>	6
2.3 第2楽章	7
2.4 第3楽章: <i>Un poco Allegretto e grazioso</i>	7
2.5 第4楽章	10
第3章 演奏と録音	11
3.1 初演から出版まで	11
3.2 19世紀ドイツ・オーストリアにおける受容	11
3.3 ヨーロッパおよびアメリカ	11
3.4 日本における演奏史	11
3.5 録音	11
参考文献	12

はじめに

## 第1章

# 作曲に関する経緯

### 1.1 背景

### 1.2 作曲過程

### 1.3 初演

### 1.4 出版

完成版の楽譜がブラームスからジムロックに発送されたのは1877年5月31日(2楽章を除く)で、1877年10月に管弦楽版総譜、パート譜、ピアノ連弾版が同時に出版されている。出版報酬は5000ターラーであった。出版の遅れは同じ時期に交響曲第2番の作曲が進められていたことが影響していると考えられる。

出版用のスコア自筆譜は1楽章のみ1900年代初頭に失われているが、2, 3, 4楽章はピーアポイント・モーガン図書館に収蔵されている。4楽章の終わりに”J. Brahms Lichtenthal Sept: 76”と書き込まれている(図1)が、当然その第2楽章はそれ以後に作成されたものである。ピアノ連弾版自筆譜はアメリカ議会図書館に収蔵されていて、”Pörschach Juni 77. J. Br.”と署名されている。

現在普及している楽譜は、他の交響曲もそうだが、1920年代のBreitkopf & Härtel社によるブラームス全集を底本としている。この全集版にはEusebius Mandyczewskiも加わっているが、特に器楽曲に関してはHans Gálが編集主幹として作業に当たっている。Dover版、あるいは国内版である音楽之友社版、全音版はいずれもこの流れに位置づけられる。

ただ、このBH全集版は自筆譜ではなく、ウィーン楽友協会に保管されている作曲者の書き込み付き初版譜をもとにしている。この書き込みには一時的な試し書きも含まれており、どれだけブラームスの最終的な決定を反映しているかが微妙な問題である。この点に注意を払ったRobert Pascall校訂による新版がHenle社から1997年に出版されている。ただしこの曲に関してはHenle版とBH全集版とでさほど重大な相違は見られない。むしろこの新版には破棄を免れたカールスルーエ初演時の1st, 2nd ヴァイオリンとヴィオラのパート譜が付録として掲載されていることが興味深い。

なお、IMSLPから、管弦楽版自筆譜(1楽章を除く)、ピアノ連弾版自筆譜、ジムロックの管弦楽版初版譜、BH全集版初版譜、BH全集版パート譜などがダウンロードできる。

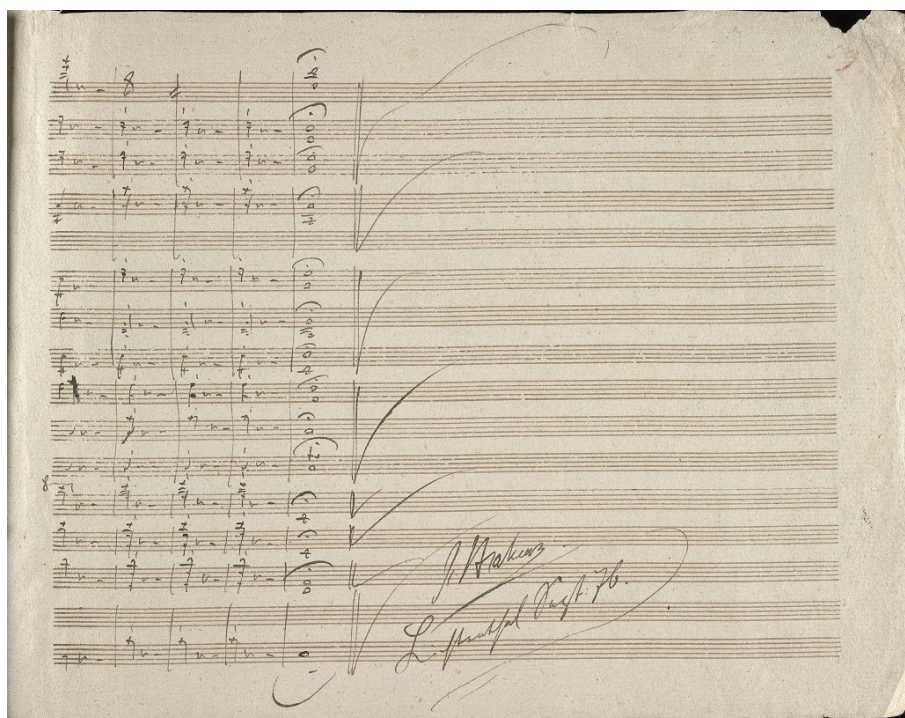


図1 自筆譜の最終ページ

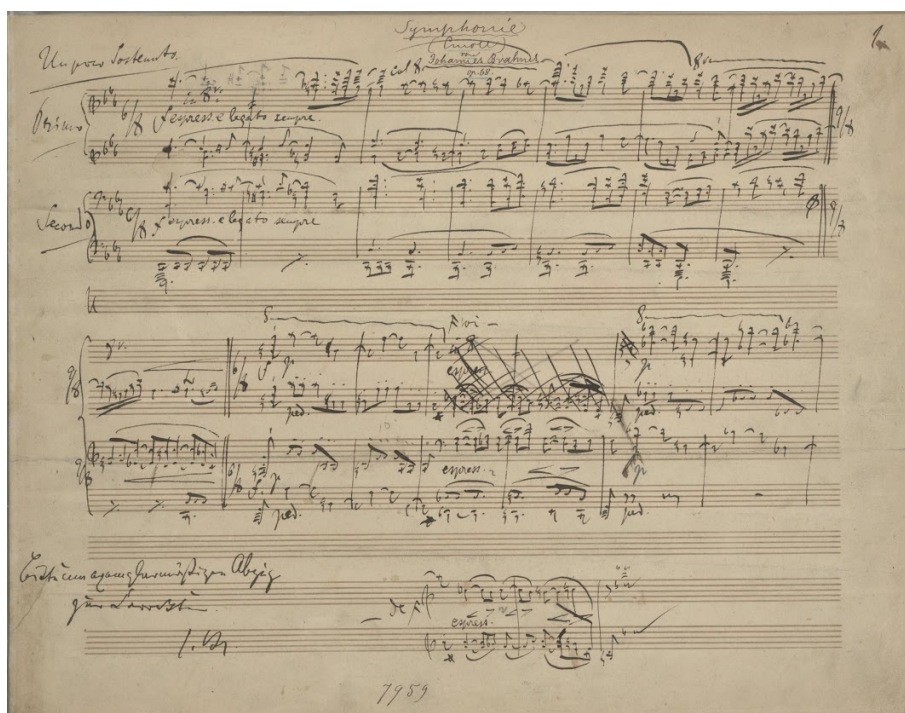


図2 ピアノ連弾版自筆譜の冒頭ページ

## 第2章

# 作品の構造

### 2.1 概観

曲想, 調性, 構成その他多くの点でこの作品はベートーヴェンの第5番あるいは第9番と並べて論じられることが多い. そこでまず最初にこれら3曲の比較を表1にまとめておこう.

	第1楽章	第2楽章	第3楽章	第4楽章
LvB5	ソナタ形式 c-moll	変奏曲 As-Dur	スケルツォ c-moll	ソナタ形式 C-Dur
LvB9	ソナタ形式 d-moll	スケルツォ d-moll	変奏曲 B-Dur	- D-Dur
JB1	ソナタ形式 c-moll	三部形式 E-Dur	三部形式 As-Dur	ソナタ形式 C-Dur

表1 LvB5, LvB9, JB1 の比較

表1から明らかなように, これら三曲はいずれも「暗から明へ」という基本的構造は共通であるが, ブラームスとベートーヴェンとで中間楽章の調の選び方にはっきりとした相違がある: ベートーヴェンは中間楽章のどちらか一方は主調である<sup>\*1</sup>のに対して, ブラームスは(4曲すべての交響曲で) 中間楽章は主調と異なる調性を持つ. また, ブラームスは中間楽章にベートーヴェン風のスケルツォを置いていない(第4番のみ第3楽章がスケルツォ風の音楽となっているが, それも2拍子である).

調性の観点からすると, ブラームスの第1番は彼の多くの作品の中でも独特の立ち位置を占めている: C-E-As-Cという五度圏上の正三角形を描くような構成は他にない. これらの調は互いに遠隔調の関係にあり, いずれも各楽章の最終和音の第3音を起点として自然に移行できる.

### 2.2 第1楽章: Un poco sostenuto — Allegro

この楽章は大規模な序奏を持つソナタ形式で, 全体の構成を表2に示す(便宜上展開部をD<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, D<sub>3</sub>に分けた). この表では再現部の入りを第343小節としたが, この点については後で詳細に議論する.

<sup>\*1</sup> ベートーヴェンの場合, 唯一第7番のみA-a-F-Aという調構造であり, 中間楽章に主調が現れない.

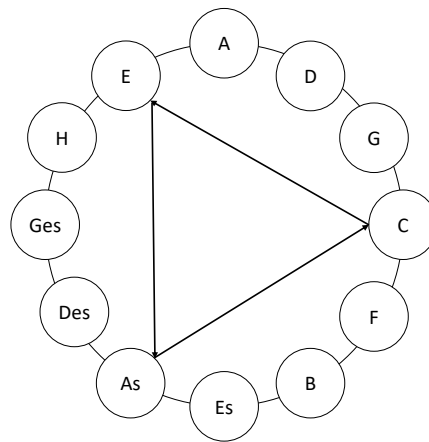
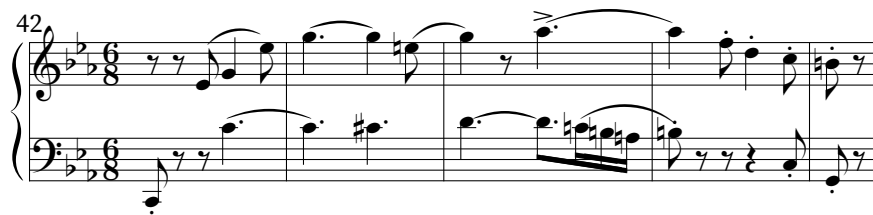


図3 第1番の調構造

序奏 I	提示部 E			展開部 D			再現部 R			コーダ C
1-37	38-188			189-342			343-462			463-511
	E <sub>1</sub>	E <sub>2</sub>	E <sub>c</sub>	D <sub>1</sub>	D <sub>2</sub>	D <sub>3</sub>	R <sub>1</sub>	R <sub>2</sub>	R <sub>c</sub>	
c	38-	130-	159-	189-	225-	293-	343-	403-	430-	c-C
	c	Es	es	H-h-c	Ges-c	c-fis	c	C	c	

表2 第1楽章の構成



譜例 1: 第1楽章第42小節から

## 2.3 第2楽章

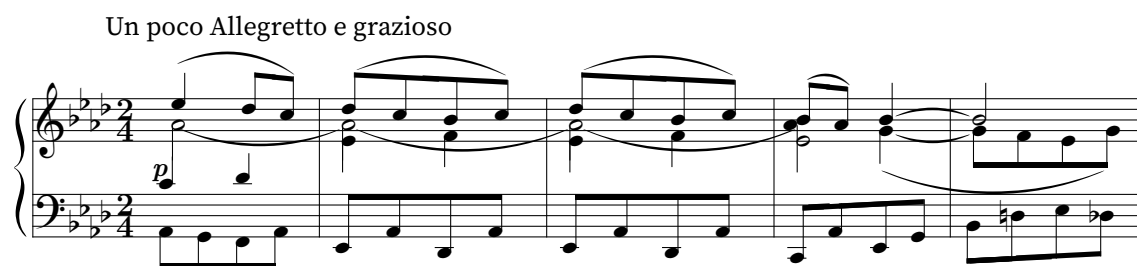
### 2.4 第3楽章: Un poco Allegretto e grazioso

ブラームスはこの大規模な交響曲の中で、164小節という小振りな「間奏曲」を用意した。ベートーヴェン風のスケルツォではなく、より古風なメヌエットのような音楽をここに置いたことは、ベートーヴェンの交響曲(例えば第5番)から意識的に距離を置いていることの現れであろう。しかも、この楽章は全体を通して二拍子で書かれており、純然たるメヌエットでさえない。この楽章は完全にブラームス風の音楽であり、この事実ひとつ取ってもブラームスの第1番が「ベートーヴェンの第10番」という評価では言い尽くせないことがよく表れている。

主部 (A)	中間部 (B)	再現部 (A')	コーダ
1-70	71-114	115-153	154-164
As-Dur, 2/4	H-Dur, 6/8	As-Dur, 2/4	As-Dur, 2/4 (6/8)

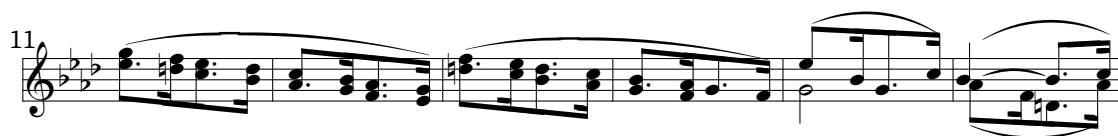
表3 第3楽章の構成

構成は表3に示すように比較的単純な三部形式 (A-B-A') だが、後で見るように再現部 A' は主部 A の単調な繰り返しとなることが避けられており、三部形式の短い楽章にしては変化に富んだ印象を与える。



譜例 2: 第3楽章冒頭

第3楽章冒頭はまずチェロのピッチカートに乗ってクラリネットが優雅な旋律を提示する (譜例2)。ブラームらしく5小節を単位とする変則的な構造を取る。しかも、2拍子が5小節続くのではなく、2+2+3+3という変拍子である。第6小節からはその反行形が続く。フルートとファゴットが加わる第11小節からは下降音型を中心とする第2句である (譜例3)。こちらは冒頭のクラリネット (第1句) と異なり4+4小節の標準的な形である。第1句と第2句がこの楽章の基本主題を構成する。



譜例 3: 第3楽章第11小節から

第19小節から、やや拡大された形で両旋律が確保される。ここで依然として第1句は9小節単位という変則的な形を、第2句は4小節単位の標準的な形を保っていることは注目し値する。また、拡大部分である第29小節から第31小節にかけて、Vn2にこの曲の基本動機 x がさりげなく登場している (譜例4) ことにも注意したい。



譜例 4: 第3楽章第29小節2拍目からの Vn2

第45小節でヘ短調に落ち込むと、クラリネット、次いでフルートとオーボエに新しいリズムが出る (譜例5) が、これは前半は第2句、後半は第1句に基づく経過句である。





## 譜例 5: 第3楽章第45小節2拍目から

減七和音を踏み台に第62小節で変イ長調に戻ると第1句を再現するが、これはあっさりとして流して遠隔調であるロ長調の中間部へと続く。ここで第65小節からの木管楽器の動きが第4楽章の第58小節や第295小節を思い出させる、と言うと穿ちすぎだろうか。その解釈に立ってこの箇所を第3楽章第28小節からの木管および譜例4に関する上の記述と比較すると、主部Aにおいて3回演奏されるこの主要主題は、最初(第1小節から)は含みのない形で提示されるが、2回目(第19小節から)は第1楽章に、3回目(第62小節から)は第4楽章に寄せている、ということになる。中間部Bが第1楽章の追憶に捧げられ、再現部A'が第4楽章の準備段階となっていることを踏まえると、この見方は如何にもありそうに思える。



譜例 6: 第3楽章第71小節から

中間部は八分の六拍子でのDis音の連打から始まる(譜例6)。これは直前の第65小節から第70小節にかけて何度も強調されるB音から誘導されたものであるが、第83小節でホルンとトランペットが強い調子でFis音を連打するに至って、これが第1楽章のオルゲルクンプトの回想であることが明らかになる(第1楽章展開部の金管楽器の用法を思い出そう)。ただ、第73小節からの順次進行は節回しや3度を好む傾向という点ではむしろ第2楽章の主要主題を思わせる。

続くトリオ風の音楽(第87小節から)は不安定な和音進行が特徴的である。それまでは口調まわりで安定していたが、ここで基本動機xがバス声部に潜ることによって多彩な和声が導き出される。

第107小節でDis音の連打だけが残ると、これをEs音に読み替えることで変イ短調でEs-Des-Ces-Bの順次下降が弦楽器のユニゾンで奏される(譜例7)。これはもちろん中間部Bを打ち切り主部Aの再現を開始するという合図であるが、同時に第4楽章冒頭の予告にもなっている(譜例??)。



譜例 7: 第3楽章第108小節からの Vn1

第115小節からの再現部A'ではまずクラリネットが冒頭主題を再現するが、フルートとオーボエによる中間部Bに基づく対旋律が付加されているために雰囲気は冒頭とはやや異なる。次いで主部では旋律2の反行形が提示された箇所は、ヴァイオリンの目新しいがどこか懐かしい旋律に置き換えられる(譜例8)。これは暗に第4楽章第1主題(譜例??)を指し示しているが、両者の類似は単なる旋律上のものだけではない。中間部の和声、リズムともに複雑な領域を抜けた後で提示されるこの変ニ長調の控えめな旋律(molto dolceの指定付き)によって、聞き手の緊張が和らげられ、自然にリラックスした状態に落ち着くことになる。この効果はまさに全曲の中で第4楽章第1主題が果たす役割と同一のものである。



譜例 8: 第3楽章第118小節2拍目からの Vn1

第126小節からの第2句は後半が大幅に拡大され、主部にあったヘ短調の経過句を飲み込んで、第144小節での第1句の再提示へと繋がる。ヴァイオリンが一瞬だけ基本主題xを思い出す(第148小節)が、しかしその思いを振り切って変ニ短調に傾斜したコーダへ入る。

コーダは第154小節から第164小節というごく短いもので、中間部Bの追憶となっている。ここではブラームスが好んで使用した二連符と三連符の交錯がくすんだニュアンスという絶妙な効果を発揮している。また、下降音型は短調と、上昇音型は長調と結び付けられており、主和音の明確な提示を回避しながらも十分な音楽的效果が発揮される。この手法は後の交響曲第3番、特に第4楽章第2主題を思わせる。

第3楽章は、大規模な第1楽章、第4楽章の間にあって規模が小さすぎ、音楽的にも内容に乏しいとの批判がある。しかしこの批判は妥当ではない。上で見たように、さりげない形で<sup>\*2</sup>第1楽章の内容を再提示し、フィナーレへの足掛かりを用意するという点にこの楽章の意義がある。この観点からするとブラームスが書き下したこの音楽は必要な内容を完全に含んでおり、作品全体を傑作たらしめるのに十分であると言えよう。

## 2.5 第4楽章

---

<sup>\*2</sup> この点でもベートーヴェンの第5番あるいは第9番との相違は際立っている。

## 第3章

# 演奏と録音

- 3.1 初演から出版まで
- 3.2 19世紀ドイツ・オーストリアにおける受容
- 3.3 ヨーロッパおよびアメリカ
- 3.4 日本における演奏史
- 3.5 録音

## 参考文献

- [1] ウォルター・フリッシュ (訳: 天崎 浩二) 「ブラームス 4 つの交響曲」 音楽之友社 (1999)
- [2] 三宅 幸夫 「ブラームス」 新潮文庫 (1986)
- [3] 池辺 晋一郎 「ブラームスの音符たち」 音楽之友社 (2005)
- [4] 西原 稔 「作曲家 人と作品シリーズ ブラームス」 音楽之友社 (2006)
- [5] 「作曲家別名曲解説ライブラリー ブラームス」 音楽之友社 (1993)
- [6] 「ブラームス回想録集」 全三巻, 音楽之友社 (2004)
- [7] スコア 音楽之友社版 (2003) 解説: 三宅 幸夫
- [8] スコア G. Henle Verlag 版 (1997) 解説: Robert Pascall
- [9] ベルホルト・リッツマン編 (編訳: 原田 光子) 「クララ・シューマン ヨハネス・ブラームス 友情の書簡」 みすず書房 (2012)